

朝日新聞  
**Reライフ**  
 人生充実  
**PROJECT**

# 古着で救える命がある

古着などを専用の回収袋に入れて送るだけで、途上国で再利用されるだけでなく、子どもたちへのワクチン寄付といった社会貢献にもつながるサービス「古着deワクチン」。回収された古着はどのようなプロセスをたどるの？ 本当に役立つの？ 朝日新聞Reライフプロジェクトの読者会議メンバーが回収センターを見学して、古着deワクチンの仕組みや意義について理解を深めました。(根本理香)

## 思いの詰まった回収袋 1日800個

古着などが詰まった回収袋は、サービスを運営する「日本リユースシステム(NRS)」(東京都港区)の古着deワクチンセンター(千葉県木更津市)に全国から集められる。その数、1日平均800個。センターでは、衣服とそれ以外の服飾品など、おまかに選別される。

作業場である倉庫の大きな扉を開けると、鮮やかなピンク色の作業着を着たスタッフが「こんにちは！」と明るい声で迎えてくれた。周囲を見渡すとベルトコンベヤーや圧縮機、フォークリフトなどが並んでいる。

NRSの輸出部長・竹内卓さんによると、古着がじかに床と触れないよう徹底しているという。「皆さんが思いを込めて送ってくださった服なので、作業効率は悪くてもゆっくり丁寧に。古着としてではなく大切な商品として扱うことを心がけています」

「使えないようなボロボロの物もここで選別するんですか」と読者会議メンバーが質問すると、「捨てられない物を『誰かの役に立つのなら』



回収袋から取り出された古着類はベルトコンベヤーに載せられ、衣類と衣類以外の服飾品などに選別される=2月2日、千葉県木更津市の古着deワクチンセンター

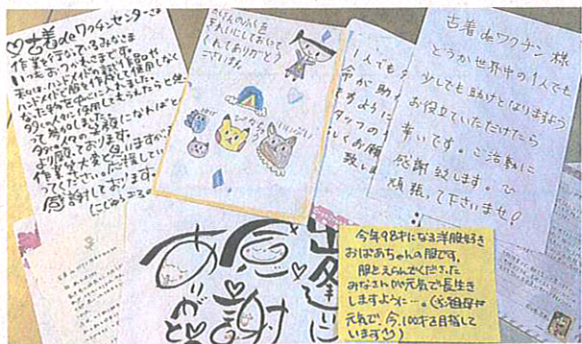
## 途上国で販売・再利用 大切な商品 丁寧に仕分け

と、わざわざ回収袋を買って送ってくださる利用者の方々なので、ボロボロで使えない物が入ってくることはほぼありません」と竹内さん。

荷ほどこぎされた衣服は100キまたは200キごとに圧縮。衣服以外の物は形が崩れないよう、圧縮せずにまとめられる。その後、24時まで入るコンテナに積み込み、NRSの直営店があるカンボジアに輸出される。

作業スタッフのほとんどは日本に住むフィリピン出身の女性だが、国籍や年齢によって給与に差がつくことはない。丁寧に一生懸命働くフィリピン女性たちの口コミで紹介の輪が広がり、今の形になったという。

仕事のやりがいについて尋ねられ、「手紙や絵がうれしい」と答えたのは日本在住31年のエルサさん。回収袋に送り主からの手紙や絵が入っていたり、回収袋に絵が描かれていたりすることが頻繁にあるといい、「私も子どもがいるので、特に子どもの絵はすごくうれしい。パワーになります」と笑顔を見せた。



古着とともに回収袋の中に入っていた送り主からの手紙

### ワクチン寄付

### 628万人分 4カ国の子へ

木更津のセンターからカンボジアの直営店に送られた古着類は、約170種類に細かく選別され、防虫・防カビ・抗菌加工が施される。現地販売のほか、約30カ国に再輸出もされる。

同じ障がい者の苦しみを味わう子が一人でも少なくなるように」との思いで働いているという。

古着deワクチンがこれまで再利用した衣類は4981万5950着分、寄付したワクチンは628万5648人分になる(いずれも今年1月末現在)。ワクチンは、認定NPO法人「世界の子どもにワクチンを」日本委員会(JCV) (東京都港区)を通じて、ラオス、ブータン、ミャンマー、バヌアツの4カ国の子どもたちに届けられる。

がいのある人の雇用は、カンボジアだけではなく、国内でも、専用の回収袋と印刷物を箱詰めした「回収キット」の製造を福祉作業所に依頼し、障がいのある人の仕事につなげている。

古着deワクチンが始まったのは10年以上前。NRS営業本部長の辻本真子さんは「お金を払って衣服を手放すことに共感する人は、今よりも少なかった」と振り返る。最近ではSDGs(持続可能な開発目標)の考え方が広まったこともあり、月間2万〜2万5千人が利用しているという。

直営店では、ポリオの後遺症が残る障がい者やストリートチルドレンだった若者など、働く機会があまりなかった人々を積極的に採用。継続的に働ける場をつくって経済的自立を支援している。

現地販売は1着5ドル。1着売れるごとにワクチン1回分が寄付される。スタッフは「自分たちと

この事業が生み出す障